令和６年５月１日

香芝市教育委員会
学校支援室

すみれだより

緑が青い空に映え、風薫る爽やかな季節になってきました。

『目に青葉　山ホトトギス　初ガツオ』

春から夏にかけての爽やかさを表す山口素堂（1642～1716）の俳句です。
※正確な引用としては、『目には青葉　山郭公　初松魚』
『目には青葉』では字余りなので、語呂よく『目に青葉』と言われるようになったようです。また、「郭公」は、平安時代以降の読みとしては「ほととぎす」ですが、現在は「かっこう」と読むのが普通です。

『青葉』・『ほととぎす』・『初鰹』はいずれも夏の季語です。
目にも鮮やかな『青葉』、美しい鳴き声の『ほととぎす』、食べておいしい『初鰹』と、春から夏にかけ、江戸の人々が最も好んだものですが、『青葉』は視覚、『ほととぎす』は聴覚、『鰹』は味覚、それぞれ違う感覚で夏を代表する風物を取り合わせたものでおもしろい句になっています。

俳句には、必ず季節を象徴する言葉である「季語」を入れることが決まりとなっていますが、それは原則一つだけとされています。ところが、この句は『青葉』も『ほととぎす』も『初鰹』もすべて同じ夏の季語であり、俳句の世界ではタブーとされている「季重なり」という季語を複数用いる手法が使われています。
しかし、この句は初夏の爽やかな魅力と楽しみを、ほとんど物の名前を書き連ねているだけでさっぱりと気持ちよく伝えているところが心地よく、多くの人に愛されてきました。それだけでなく、頭の「目には青葉」という部分は六文字。俳句の基本となる、心地よいリズムを生み出す文字数「五・七・五」の原則からも外れる「字余り」というイレギュラーな技も相まって、斬新な一句に仕上がっています。この句が一躍有名となり、江戸っ子の間で、初夏に出回る「初鰹」を食べることが粋（いき）の証となりました。

「鰹」豆知識
江戸時代、「かつお」は「勝魚（※）」ということで縁起のよい食べ物ものとされており、中でも初夏に獲れる「初鰹」は大変高価なものでしたが、江戸っ子に

とっては「女房を質（しち）に入れてでも食べたい」と言われるほど人気だったそうです。初物を食べれば長生きできるという言い伝えもあったようで、「たとえ高価でも手に入れることが粋である」と、なんとも江戸っ子らしい風土が感じられる言葉にもなっています。

※天文六年（１５３７年・戦国時代）夏のこと。北条氏綱が小田原沖でカツオ釣りを見物していたところ、一尾のカツオが跳ねて船の中に飛び込んできました。氏綱は、「戦に勝つ魚（かつうお）が舞い込んだ」とその吉兆を喜び、その後、武州の兵と戦って大勝利をあげました。このことから縁起の良い魚とされ、その後の江戸っ子が縁起物として初鰹を珍重するようになったのは、この故事が由来のようです。

すみれ教室　５月の予定

月	火	水	木	金
４／２９	３０	５／１	２	３
昭和の日	ゲストティーチャー （プログラミング体験）	栽　培	体育活動 （卓球）	憲法記念日
６	７	８	９	１０
振替休日	ゲストティーチャー （初夏の野草摘み）	すみれゴール （ゲートボール場）	体育活動 （卓球）	習　字
１３	１４	１５	１６	１７
そうじ・HM 読書タイム	ゲストティーチャー （小物作り）	栽　培	体育活動 （総合体育館）	校外学習
２０	２１	２２	２３	２４
そうじ・HM 読書タイム	ゲストティーチャー （切手ボランティア）	すみれゴール （ゲートボール場）	体育活動 （卓球）	ゲストティーチャー （花を使った制作）
２７	２８	２９	３０	３１
そうじ・HM 読書タイム	ゲストティーチャー （プログラミング体験）	栽　培	ゲストティーチャー （似顔絵講座）	校外学習予備日 ※雨天の場合中止

爽やかな５月。心と身体をリフレッシュ！